

芸術は障害をプラスに

会福祉事業団の北岡賢剛理事長(50)は10月末に盛岡市を訪れ「芸術を通して障害者が個人として尊重される。芸術は障害をプラスに変えられる」とその可能性を指摘した。

近年注目を集める障害のある人の芸術活動。既成概念を飛び越える自由な着想や表現が評価され、国内外で大規模な展覧会も増えている。長年障害者アートに携わる国内の第一人者、滋賀県社



「最近は今まで以上に芸術の持つ力を感じている。芸術を通して一人一人が尊厳を持って生きることができる社会にしたい」と話す北岡賢剛さん

同事業団が運営する

ボータレス・アートミュージアムNO-MA(同県近江八幡市)は2004年の開館以来、国内の障害者アートの主要な拠点となっている。発掘したアーティストは約600人。06、08年は世界最大規模の障害者アートのコレクション「アール・ブリュット・コレクション」(スイス・ローザンヌ)との連携事業を成功させ、日本の作品を世界に発信した。

北岡理事長は現在、来年3月からパリ市立美術館で開かれる日本人作家の大規模展覧会「アール・ブリュット

きたおか・けんこう 1958年生まれ。社会福祉法人しがらき会を経て滋賀県社会福祉事業団。90年から障害者アートの展覧会などを行い、2004年障害の有無にかかわらず作品を展示する「ボータレス・アートミュージアムNO-MA」を設立。障害者アートを福祉ではなく芸術として評価する活動を行っている。NPO法人はれたりくもったり副代表理事、厚生労働省社会保障審議会障害者部会委員なども務める。滋賀県在住。

滋賀県社会福祉事業団理事長・北岡さん来県

偏見なく個人を見て

・ジャポネ」の準備で就職するケースが増え国内外を飛び回る。たてているという。埋もれた、障害者イコール支がちな障害者の作品を援されるべき弱い存在見いだし、発信してきという見方が大勢を占た土壌あってこそ現る」と期待した。

その上で、芸術を通して障害者を見ると、一人の作家として独立し、尊重される存在になり得ると指摘。「障害があるからこそその表現や、集中心から生まれる作品が人を感動させている。マイナスのとらえ方しかされていなかった障害が武器になる」と「芸術の力」に期待する。

では、私たち鑑賞者は作品をどう受け止めれば良いのか。「作品を見たまま感じたまま、面白いと思えば素直にそう受け止めて」。所属する施設などは関係なく、作家個人と向き合ってほしいという。「芸術活動においてあくまで主語は個人。障害者アートは障害者のサクセスストーリーではない。『障害があるのに偉い』『障害を乗り越えて頑張っている』という見方はしないほしい」

近年、滋賀県では美術の専門教育を受けた若者が障害者アートにほれ込み、福祉施設に

就職するケースが増えているという。埋もれた障害者の作品を、まな場で展示できるようにすれば一層発展する」と期待した。

北岡理事長は10月31日、盛岡市で開かれた公開福祉講演会(県精神保健ボランティア連絡会主催)で講演した。